Osaka University Knowledge Archive

Title	鷺流狂言台本詞章の国語学的研究
Author(s)	米田, 達郎
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44763
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【6】

氏　　名	米田達郎（よねだ たつろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18081　号
学位授与年月日	平成15年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	**鷺流狂言台本詞章の国語学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　金水　敏 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　助教授　岡島　昭浩

論文内容の要旨

B5版縦書き189頁（内目次4頁）、400字詰め原稿用紙換算で470枚程度に相当。

序章では本論文の目的、研究状況の概観と本論文の構成、使用資料の一覧を掲げる。ことに、従来国語史研究で扱われることの少なかった鷺流狂言台本を中心とすることの意義を述べる。第一章「鷺伝右衛門派における狂言詞章の変遷－対称代名詞を中心に－」では、対称代名詞の使用状況について伝右衛門派の保教本と野中本を比較し、前者では六段階の敬意が区別されていたものが後者において三段階にまとめられていることを述べる。第二章「鷺流狂言詞章保教本の待遇表現について－対称代名詞オマエを中心に－」では、鷺流のなかでも特に伝右衛門派の保教本において対称代名詞オマエが多数用いられ、かつ敬意において最高位に位置づけられていることについて、当代の口頭表現の反映であること、そしてそれが保教の狂言詞章に対する態度の反映と捉えうることを述べる。第三章「鷺流詞章保教本の尊敬表現について－「オーナサレマス」を中心に－」では、他の流派の台本に先駆けて尊敬表現「オーナサレマス」を保教本が積極的に取り入れていることを明らかにし、これも保教本の特色と位置づけられることを述べる。第四章「江戸時代中後期における狂言詞章の丁寧表現について－マシテ御座ルを中心に－」では、江戸時代中後期の狂言詞章に多く見られるマシテ御座ルが丁寧語マスと古語的表現テ御座ルとの複合によって、狂言詞章において造語されたものであるとの考えを述べる。第五章「マシテ御座ルの使用者について－武士言葉の可能性－」では、式亭三馬が「本江戸」の言葉の一つとして捉えていたマシテ御座ルについて狂言台帳（脚本）その他をもとに検討を加え、武士がよく使っていたかも知れないが必ずしも武士専用の言葉ではないという結論を導いている。第六章は「資料紹介　含翠堂文庫所蔵鷺流狂言翻字」に充てられている。終章では、本論文の論旨をまとめ、結論を述べている。

論文審査の結果の要旨

論者は、本論文において、従来論じられることの少なかった鷺流狂言台本に新しい光を当てた。鷺流台本を含め、江戸中後期の狂言台本は、舞台言語として独自の整理が施され、口頭言語から離れていったために、口頭言語の変遷を中心課題とする従来の国語史研究からは軽視されてきたのである。論者は、亀井孝の「狂言語」、金水の「役割語」等の概念を援用しながら、狂言詞章は「狂言らしさ」を体現した独自の言語体系を構成しているのであり、それ自身

の構築の原理や工夫を追求することに、新しい国語史の道が開けることを示した。論者は「狂言らしさ」を実現するための語彙面での工夫として、「当代型」「古語型」「新古語型」という三つのあり方を設定し、それぞれについて具体例を示し、詳細に検討していった。すなわち当代型とは、分かりやすい狂言詞章を作るために積極的に当代の口頭表現を取り入れたものであり、古語型とは、古典劇としての格式を感じさせるために保存された語彙であり、新古語型とは、当代語的な要素と古語的な要素を組み合わせた造語であり、分かりやすさと格式を同時に獲得できるものとしている。また、論者が選んだ敬語表現という主題は、登場人物の社会的関係が重要な意味を持つ演劇作品としての狂言を扱う上で最適のものであり、先の新しい語彙分類と組み合わせることにより、狂言独自の言語体系を立体的に浮かび上がらせることに成功した。

このように、未開拓の題材を斬新なアイディアで切り開いていったという点において大いに評価できる本論文であるが、一方で、少なからぬ問題を抱え込んでいる点も指摘せざるを得ない。一つは論文の構成の問題である。例えば第一章と第二章はほとんど同じ題材を扱った章で、それぞれを他の章と対等に配置するのは不自然である。また第六章の資料紹介は本論の内容とさほど緊密に関係している訳ではなく、本論文に取り込むことの意義が疑われる。また一つには、論旨そのものの問題である。第三章において「オーナサレマス」を尊敬表現形式とし、「オーナサル」との交替現象を指摘、原因として丁寧表現「マス」の増加を挙げているが、そもそも「オーナサレマス」が尊敬＋丁寧という構造を持っていることは自明であり、そのことを的確に指摘すれば論旨は全く違うものになっていたはずである。また第四章と第五章は論旨がうまくつながっておらず、狂言詞章、三馬が指摘する「本江戸」、狂言台帳など、それぞれに現れる「マシテ御座ル」がどのような関係にあるのか明らにされていない。

以上、最終的な練り上げという点において物足りなさを感じさせはするものの、新しい国語史研究を切り開いていこうとする研究者の出発点としては充分の力量を発揮した好論であるといえる。

なお、2003年7月25日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。